新潟工科大学研究紀要　第 15 号　2010 年 12 月

授業アンケート結果の検討

花岡　明正*

（平成 22 年 10 月 29 日受理）

A Study on the Results of the Student Course Evaluation Questionnaire

Akimasa HANAOKA*

This paper discusses the results of the student course evaluation questionnaire conducted in Niigata Institute of Technology at the end of the spring semester 2010. The findings include that there is a positive correlation between the three questionnaire items (clarity and intelligibility of speech, skillfulness in promoting student understanding, providing explanations of the subject goals and syllabus) and the student ratings whereas a negative correlation was found between the ages of instructors and the ratings.

Key words: the Student Course Evaluation Questionnaire

1.　はじめに

本稿は新潟工科大学で実施された学生授業アンケートの「共通授業アンケート」の集計結果について検討したものである。この作業は、新潟工科大学ＦＤ委員会の委員として私が担当したものである。

新潟工科大学の授業アンケートは、何らかの分析検討を想定して設計されたものではなく、指摘できることはそう多くはないであろうと思われた。検討も相関を調べるだけの簡単なものにとどめた。ささやかな検討結果が得られたわけであるが、ささやかなものとはいえ、教員はもとより、アンケートに関わる職員また学生諸君に、またその他関係者に報告すべきものと考えられたので、本紀要に掲載していただくこととした。なお、こうした役割での作業がそうであるように、本稿の内容についての責任は担当者である私にある。

２. 授業アンケートについての説明

新潟工科大学では、大学自己評価のひとつとして、学生に対して授業評価アンケートを実施している。アンケートは、前期と後期の各学期ごとに、学期の後半に行われる。授業アンケートは、開設されている授業のクラスごとに実施される。原則としてすべてのクラスが対象であるが、履修登録者が 5 名以下のクラス、集中・不定期開講科目等のクラスは対象とされない。授業アンケートは、講義科目（座学）対象の「共通授業アンケート」の

*　　法学（教養系）准教授

ほかに、実験実習科目のアンケート、体育実技アンケートも行われる。また卒業研究についても別にアンケートが実施される。

学生は受講しているほぼすべての授業について受講しているクラスごとに授業アンケートに答えることになる。

授業アンケートは集計され、全学の平均値と各学科ごとの平均値が計算される。教員には、こうした平均値とともに、自分のクラスの集計結果が返される。全学と各学科ごとの平均値は、新潟工科大学ＨＰでも公開される。

今回本稿で検討しているのは、直近の 2010 年度前期の「共通授業アンケート」である。その概要は以下の通りである。

実施期間：平成 22 年 6 月 21 日（月）～7 月 23 日（金）

アンケート対象科目履修者延べ人数：7482 名

アンケート実施件数：158 件（対象クラス数）

回収延べ人数：6027 名

回収率：80.6％

2009 年後期から授業アンケートの設問がそれ以前のものと一部変更された。今回の 2010 年前期の授業アンケートの設問は 2009 年後期のものと同一である。したがって以下の検討では 2009 年後期の結果も参照して検討している。

授業アンケートは 3 つの部分から構成されている。

Ａ：学生の所属学科と入学年度をたずねる質問（フェイス部分）　Ｑ１ Ｑ２

Ｂ：学生の授業への取り組みをたずねる質問（自己評価）　Ｑ3～Ｑ７

Ｃ：授業についてたずねる質問（授業評価）　Ｑ８～Ｑ 15

３. 授業アンケートの結果～全体～

Ｂ（自己評価）を見ると、学生の出席や受講態度は良好と言えよう。

Ｑ ６「この授業について、１週間あたりどの程度授業時間以外で勉強しましたか」の回答は、「2.1」であった。2009 年度後期の結果は、「2.0」であった。1 つの講義科目に対する授業外学習の時間は、「何もしなかった」というわけではないが、せいぜい 30 分程度しかしていないことになる。[1]）

１　学生の１週間の授業外の学習時間がどのくらいになるのかはアンケートからははっきりしないが、日本の一般的に大学生の学習時間とおおよそ一致するものと思われる。日本の大学生の平均は、１週間あたり、授業への出席 21.8 時間、授業時間外での学習活動 7.1 時間とのことである（日本労働研究機構「日本の大学と職業～高等教育と職業に関する 12 カ国比較調査結果～」）。

大学での講義等の学習時間は、日本の大学生も欧米の大学生とそう変わらないが、授業外での学習時間が日本はきわめて少ない。

C（授業評価）を見ると、Q 15「総合評価」は、「3.5」である。「普通」と「少し良かった」の間ということである。評価としては、十分であろう。

平成２２年度　前期　授業アンケート設問内容および全学科集計結果

A．あなたの所属学科、入学年度

【Q1】所属学科　1．機械制御システム工学科　2．情報電子工学科　3．環境科学科　4．物質生物システム工学科　5．建築学科　6．その他

【Q2】入学年度　1．2004 以前　2．2005　3．2006　4．2007　5．2008　6．2009　7．2010　8．その他

B．あなたの授業への取り組みについての自己評価

【Q3】この授業にどのくらい出席しましたか。【平均値:4.4】
5．すべて出席した　4．1回欠席した　3．2回欠席した
2．3回欠席した　1．4回以上欠席した

【Q4】授業中、私語をかわしたこともなく、受講態度は良かったと思いますか。【平均値:4.1】
5．そう思う　4．どちらかと言えばそう思う　3．どちらとも言えない
2．どちらかと言えばそう思わない　1．そう思わない

【Q5】この授業に意欲的に取り組んだと思いますか。【平均値:3.9】
5．そう思う　4．どちらかと言えばそう思う　3．どちらとも言えない
2．どちらかと言えばそう思わない　1．そう思わない

【Q6】この授業について、１週間あたりどの程度授業時間以外で勉強しましたか。【平均値:2.1】
5．2時間以上　4．1時間以上2時間未満　3．30分以上1時間未満
2．30分未満　1．ほとんど行わなかった

【Q7】授業中にノートやメモをとりましたか。【平均値:3.8】
5．よくとった　4．どちらかと言えばよくとった　3．どちらとも言えない
2．あまりとらなかった　1．全くとらなかった

C．授業評価

【Q8】この授業の内容・目標、成績評価の仕方・基準についての説明は、分かりましたか。【平均値:3.3】
5．とてもよく分かっている　4．よく分かっている　3．だいたい分かっている
2．あまりよく分からない　1．ほとんど分からない

【Q9】この授業の難易度はどうですか。【平均値:2.6】
5．易しすぎる　4．すこし易しい　3．ちょうど良い
2．すこし難しい　1．難しすぎる

【Q10】この授業での課題の量はどうですか。【平均値:3.1】
5．かなり多い　4．やや多い　3．普通
2．やや少ない　1．かなり少ない

【Q11】先生の話し方や、黒板の板書、パワーポイント等の字や図形は、明瞭で分かりやすいものでしたか。【平均値:3.4】
5．大変分かりやすかった　4．どちらかと言えば分かりやすい　3．どちらとも言えない
2．どちらかと言えば分かりにくい　1．分かりにくい

【Q12】参考書や資料など、情報提供の量はどうでしたか。【平均値:3.0】
5．多すぎる　4．やや多い　3．ちょうど良い
2．やや少ない　1．少なすぎる

【Q13】授業では、演習問題や小テストなどを用いながら、授業内容を理解させようとしていましたか。【平均値:3.6】
5．そう思う　4．どちらかと言えばそう思う　3．どちらとも言えない
2．どちらかと言えばそう思わない　1．そう思わない

【Q14】この授業を受けて、この分野に興味がわきましたか。【平均値:3.4】
5．大変興味がわいた　4．やや興味がわいた　3．あまり変わらない
2．どちらかと言えば興味がわかなかった　1．全く興味がわかなかった

【Q15】総合的に評価して、この授業はどうでしたか。【平均値:3.5】
5．大変良かった　4．少し良かった　3．普通
2．あまり良くなかった　1．全く良くなかった

4．学生の自己評価～学年別～

入学年度別の回答の平均を見てみよう。ほとんど入学年度別に目立った差はないように見える。

ただ、Q 6 に注意したい。前述のように全体平均は「2.1」である。学年別の平均を見ると、2009 年後期、1 年次生（2009 年度入学生）は、「2.2」で「2.0」を上回っており、2 年次生（2008 年度入学生）と 3 年次生（2007 年度入学生）は、「2.0」を下回っている。2010 年前期、1 年次生（2010 年度入学生）は、「2.2」である。2 年次生（2009 年度入学生）と 4 年次生（2007 年度入学生）は、「2.0」を下回っており、平均が「2.0」を下回る。3 年次生、4 年次生には、就職活動の影響も考えられるし、その他の理由も考えられなくもないが、2 年次生の授業外の学習時間が「ほとんど行わなかった」に傾いていることは気になる。

Q 3 は、学年が進むにつれて、出席が悪くなっていることを示している。これは、2009 年後期も 2010 年前期も同じである。この設問は、欠席回数をたずねているのだか、授業

学習時間の少なさは、たんに量的な少なさにとどまらない。授業外で殆ど勉強しない学生に対して授業のレベルは、学生が勉強していないことを前提に行われることになる。そうでないと学生の実態と乖離した授業が行われるということになる。授業では学生に学習への動機付けを行い、興味をもたせ、学習意欲を高めることが必須となっている。

アンケートは5週間に渡って行われ、実施の初めと終わりでは授業回数が違う。アンケート実施のスケジュールは、学生が同じ日に複数回のアンケートを受けることが、できるだけないようにという配慮と、教員の授業の都合とをかみ合わせて決められていることから、実施の順番は学年に配慮せずに行われている。集計して平均値をとった数字にどの程度の意味をもたせることができるかは不確かである。しかし、学年が進むにつれて、欠席が多いということになれば、それは大いに心配なことである。だが、このアンケートでは出席状況の確認は、できない。

なお回答全体を通じて、学科による特段の差は見られない。

また、授業評価については2009年後期、2010年前期ともに、学年による差は見られない。

表 1　H22年度前期 授業アンケート（入学年度別）各設問平均値

H２２前期期 実施		自己評価					授業評価							
入学年度	回答者数（延べ）	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	Q14	Q15
2007年度	294名	3.34	4.05	3.76	1.99	3.72	3.29	2.63	3.02	3.46	2.97	3.63	3.41	3.63
2008年度	1,234名	4.21	4.15	3.83	2.13	3.79	3.24	2.58	3.09	3.39	2.92	3.69	3.37	3.59
2009年度	1,757名	4.25	4.10	3.90	1.98	3.81	3.26	2.66	3.13	3.40	2.96	3.61	3.38	3.52
2010年度	2,608名	4.64	4.02	4.03	2.20	3.76	3.26	2.65	3.22	3.41	3.01	3.59	3.38	3.53

５. 学生の授業評価～設問間の相関～

設問回答間の相関を見てみよう。

Ｑ15［総合評価］と相関の高い設問は、Ｑ14（0.73）、Ｑ11（0.69）、Ｑ13（0.63）、Ｑ8（0.54）である。Ｑ14「興味」と授業評価には高い相関がある。Ｑ11［話し方等が明瞭でわかりやすい」ことは、授業評価と結びついている。[2]）Ｑ13では、授業時の演習や小テスト等の工夫をたずねているが、これも授業評価と相関が高い。また、Ｑ8の授業についての説明も相関が高い。これらから「明瞭でわかりやすい話し方や板書」、「演習や小テスト等の工夫」、「授業の目標や内容等についての説明」が、授業評価と強く結びついていることがわかる。

Ｑ14［興味］は、Ｑ15［授業評価］のほかに、Ｑ11（0.61）、Ｑ13（0.58）、Ｑ8（0.51）と高い相関がある。そして、Ｑ9（0.41）、Ｑ5（0.40）とも相関が認められる。「興味」は、Ｑ11［話し方等の明瞭さ］とＱ13［授業時での演習等の工夫］、Ｑ8［授業についての説明］と結びつきが強く、さらに授業の難易度とも、学習意欲とも関わっている。Ｑ9は易しいほうが高スコアーだから、あまり難しくないレベルのほうが興味を持てるという

---

[2]　東海大学での「学生による授業評価アンケート（講義科目用）」でも授業評価に影響を及ぼす評価項目として「話し方」「黒板の使い方」「授業参加」があげられている（安岡・滝本・三田・香取・生駒『授業を変えれば大学は変わる』1999年、63頁）。

ことになる。

Ｑ 11［話し方等の明確さ］が授業評価での鍵となっている。このＱ 11 と高い相関の設問は、Ｑ 15（0.69）のほかに、Ｑ 14（0.61）、Ｑ 13（0.59）である。話し方等が明瞭でわかりやすいことは、学生の興味（Ｑ 14）にもつながり、総合評価（Ｑ 15）も高い。また、話し方等が明瞭でわかりやすいこと（Ｑ 11）は、授業での演習等の工夫（Ｑ 13）とも結びついている。

表 2　H22 年度前期 授業アンケート質問間相関

H22前期 全学結果		自己評価					授業評価							
		Q3.欠席状況	Q4.受講態度	Q5.学習意欲	I06.自習	Q7.ノート メモ	Q8.授業説明	Q9.授業の難易度	Q10.課題量	Q11.話し方 板書等	Q12.情報提供	Q13.授業工夫	Q14.興味	Q15.総合評価
自己評価	Q3.欠席状況	1.00												
	Q4.受講態度	0.15	1.00											
	Q5.学習意欲	0.21	**0.60**	1.00										
	I06.自習	0.05	0.17	0.25	1.00									
	Q7.ノート メモ	0.10	0.36	0.39	0.25	1.00								
授業評価	Q8.授業説明	0.07	0.33	**0.43**	0.23	0.27	1.00							
	Q9.授業の難易度	-0.01	0.10	0.19	0.13	0.07	**0.43**	1.00						
	Q10.課題量	0.06	0.11	0.12	0.25	0.08	0.09	0.05	1.00					
	Q11.話し方 板書等	0.02	0.24	0.32	0.14	0.23	**0.51**	0.39	0.05	1.00				
	Q12.情報提供	0.00	0.11	0.16	0.17	0.11	0.30	0.33	0.26	0.34	1.00			
	Q13.授業工夫	0.03	0.29	0.32	0.19	0.27	**0.48**	0.30	0.06	**0.59**	0.30	1.00		
	Q14.興味	0.05	0.26	**0.40**	0.19	0.22	**0.51**	**0.41**	0.05	**0.61**	0.34	**0.58**	1.00	
	Q15.総合評価	0.03	0.27	0.39	0.15	0.24	**0.54**	0.38	0.01	**0.69**	0.31	**0.63**	**0.73**	1.00

６. 授業アンケートから見える教員

教員の年齢と設問回答との相関を見ると、２つの設問で高い相関が見られた。Ｑ 11「話し方等が明瞭でわかりやすいこと」（－0.62）、Ｑ 15「授業評価」（－0.54）である。年齢が高いほど、学生の評価は低い。

もちろんこれは、負の相関関係があるということであって、年齢の高い教員が全員一律に学生評価が低いということではない。年齢にかかわらず授業評価の高い教員もいることも指摘しておくべきであろう。

新潟工科大学には、企業その他、大学での教育職以外から、ある程度の年齢になってから教授職に就いた教員も多い。したがって年齢の高い教員が、そのまま教員としてのキャリアが長いというわけではないので、教員勤務年数との関係はわからない。

他校でのアンケート結果でも年齢との逆相関の傾向はあるようである。[3]

話し方、板書その他を明瞭でわかりやすくすることは、授業評価と高い相関がある。話し方等を明瞭にすることは、授業評価を高めることにつながる。そして話し方、板書等を

---

[3]　東海大学での「学生による授業評価アンケート（講義科目用）」での結果も、年齢が上がると評価は下がる傾向が示されている（註 2 前掲書、62 頁）。

明瞭でわかりやすくすることは、授業スキルでかなりの程度補うことが可能であるとされる。こうした点でのサポートを必要な教員に提供していくこともＦＤには求められよう。

経験に基づく指導といった年齢が高い教員の優位な点は、卒業研究等で発揮されるとも考えられるが、しかし、それはこの授業アンケートの範囲外である。

７. まとめ

学生の授業に対する評価から次のことが言える。ひとつは、話し方等が明瞭でわかりやすいこと、授業を理解させる工夫があること、授業の目標や進め方などについて説明を行うこと、といったことが、授業評価と相関が高いということである。いまひとつは、教員の年齢と､話し方等が明瞭でわかりやすいことの間には､負の相関が見られるということ、また授業評価との間にも負の相関が見られるということである。

付記

本稿の作成に際しては、学習支援センター職員の遠藤由美さんに相関を計算していただいたり、本文に掲載している表を作成していただいた。